

問1 11世紀後半、白河天皇が位を譲って上皇（太上天皇）となった後も、宮中（院）において政治の実権を握った政治形態を何と呼びますか。最も適切な語句を選びなさい。（2025年 埼玉県公立入試 類似）

1. 院政 2. 執権政治 3. 建武の新政 4. 摂関政治

問2 平安時代、藤原氏が天皇の幼少期には「摂政」、成人後には「関白」という職に就き、政治の実権を握った政治体制を何と呼びますか。（2023年 岩手県公立入試 類似）

1. 摂関政治 2. 親政 3. 執権政治 4. 院政

問3 平安時代に国風文化が発展した歴史的背景と、その文化的な特徴について説明した文として最もふさわしいものはどれですか。（2017年 長崎県公立入試 類似）

1. 武士が政治の実権を握ったことで、力強く素朴な文化が好まれ、猿楽や田楽などの芸能が民衆に広がった。  
2. 大陸との公的な交流が途絶えたことで、日本独自の感性を重視する風潮が生まれ、仮名文字による文学が発達した。  
3. 町人の経済力が向上したことで、浮世草子のような庶民の娯楽や日常生活を題材とした文化が全盛期を迎えた。  
4. 禅宗の影響を受けて、華やかさを排除した質素で静かな美意識が貴族や武士の間で共有されるようになった。

問4 平安時代中期、社会への不安や「仏教の教えが正しく伝わらなくなる時期が来る」という末法思想が広まるなかで、阿弥陀如来にすがって「南無阿弥陀仏」と唱えることにより、死後に苦しみのない世界へ生まれ変わることを願う信仰が流行しました。この信仰の名称として正しいものを、次の選択肢から選びなさい。（2022年 新潟県公立入試 類似）

1. 聖武天皇の時代に国家の平穏を祈って各地に建立された国分寺の信仰  
2. 厳しい修行や座禅を通じて自らの力で悟りを開こうとする禅宗  
3. 空海が中国から伝え、山の中での修行を重視した真言宗  
4. 阿弥陀如来の力によって極楽浄土への往生を願う浄土信仰

問5 平安時代中期、遣唐使の廃止などを背景に日本独自の貴族文化である国風文化が栄えました。この時期、藤原道長の娘である中宮彰子に仕え、貴族社会の人間模様を全54帖にわたって描いた長編小説の作者は誰ですか。（2024年 栃木県公立入試 類似）

1. 清少納言 2. 紫式部 3. 小野小町 4. 和泉式部

問6 10世紀から12世紀にかけて、武士が地方の勢力から国家の政治を動かす存在へと成長した過程を説明した次の記述のうち、最も古い時期に起きた出来事はどれですか。（2022年 三重県公立入試 類似）

1. 源義家が東北地方で起きた戦乱を平定し、東国の武士との結びつきを強めた。  
2. 平将門が関東において反乱を起こし、自ら「新皇」と称して朝廷に抵抗した。  
3. 平清盛が武士として初めて太政大臣に任命され、一族で朝廷の要職を独占した。  
4. 源頼朝が征夷大將軍に任命され、鎌倉に武士独自の政権である幕府を開いた。

問7 平安時代初期に最澄が比叡山に延暦寺を建立し、新しい仏教を広めた背景にある、当時の仏教の傾向や特徴について述べた文として適切なものはどれですか。（2018年 茨城県公立入試 類似）

1. 武士の精神的な支えとして、座禅によって悟りを開くことを重視する教えが主流となった。  
2. 政治に深く関わりすぎた奈良の仏教から離れ、山の中で厳しい修行を行う山岳仏教としての性質を強めた。  
3. 死後の極楽浄土を願い、念仏を唱えることで救われるという教えが一般民衆の間で急速に広まった。  
4. 国家の保護を受けて奈良の寺院で学問に励むことを目的とし、政治との結びつきをより強めた。

問8 8世紀末の日本において、それまでの奈良の地にあった都から、現在の京都府にあたる地へ都を移し、律令政治の立て直しを図った人物は誰か。（2018年 沖縄県公立入試 類似）

1. 聖武天皇 2. 推古天皇 3. 天智天皇 4. 桓武天皇

問9 10世紀から11世紀頃の日本において、唐との交流が途絶えた後に発達した「国風文化」の特色を説明したものとして、最も適切なものはどれですか。（2022年 静岡県公立入試 類似）

1. 遣唐使によってもたらされた大陸的な様式が、建築や仏像制作の主流となった。  
2. 禅宗の影響を強く受け、水墨画や枯山水の庭園といった簡素な美が好まれた。  
3. かな文字が考案され、清少納言などの女性らによって随筆や物語が執筆された。  
4. 武士の気風を反映し、軍記物語や力強い彫刻が数多く制作された。

問10 平安時代末期、平清盛は武士として初めて、朝廷における最高職である官職に任命されました。その官職名を次の中から選びなさい。（2017年 千葉県公立入試 類似）

1. 執権 2. 征夷大將軍 3. 太政大臣 4. 関白

問11 平安時代後期の政治において、白河上皇が始めた「院政」の仕組みや目的について説明したものとして、最も適切な内容を選んでください。（2019年 和歌山県公立入試 類似）

1. 天皇が位を退いて上皇となり、摂政や関白を抑えて「院」と呼ばれる場所で自ら政治を行う仕組み。  
2. 天皇が幼少の間に、母方の親戚である藤原氏が摂政となって政治を代行する仕組み。  
3. 地方の有力な武士を朝廷に招き、武力によって貴族の不正を正そうとする政治の仕組み。  
4. 天皇が仏教に深く帰依し、政治のすべてを僧侶に委ねて国の安定を図る仕組み。

問12 平安時代中期、藤原道長は自身の娘を次々と天皇の後（きさき）として送り込み、その娘が生んだ子が天皇に即位すると、自らは天皇の母方の親戚として政治の実権を握りました。このような立場を指す言葉と、道長やその子の頼通が行った政治体制の名称として正しい組み合わせを選びなさい。（2024年 奈良県公立入試 類似）

1. 外戚（がいせき）の立場を利用した、摂関政治  
2. 院（いん）の立場を利用した、院政  
3. 執権（しっけん）の立場を利用した、合議制の政治  
4. 將軍（しょうぐん）の立場を利用した、幕府政治

問13 11世紀前半の藤原道長は、自身の娘を一条天皇や三条天皇などの后とし、その子供を次の天皇に即位させることで、複数の天皇の祖父という立場を築きました。このように、藤原氏が権力を維持・拡大するために利用した「天皇の母方の親戚」という血縁関係を何といいいますか。（2022年 熊本県公立入試 類似）

1. 院近臣 2. 門閥 3. 氏長者 4. 外戚

## 答え合わせ・解説

|     |                                                              |                                                                                                                                                                                                                       |
|-----|--------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 問1  | 答え 1<br>院政                                                   | 1086年に白河上皇が始めた政治の仕組みです。それまで藤原氏が摂政や関白として権力を振るっていた「摂関政治」を抑え、天皇の父や祖父である上皇が自らの子孫に皇位を継がせながら政治を主導しました。この仕組みは、のちに武士である平清盛が台頭する12世紀後半まで、政治の大きな流れとなりました。                                                                       |
| 問2  | 答え 1<br>摂関政治                                                 | 藤原氏は自分の娘を天皇の後（きさき）とし、その子供を次の天皇に立てることで、天皇の母方の親戚（外戚）として強い権力を持ちました。天皇の成長に合わせて摂政や関白という役職を使い分け、一族で政治の中心を担ったことが特徴です。                                                                                                        |
| 問3  | 答え 2<br>大陸との公的な交流が途絶えたことで、日本独自の感性を重視する風潮が生まれ、仮名文字による文学が発達した。 | 遣唐使の派遣が停止されたことで、唐の文化をそのまま模倣する段階から、日本の風土や生活感覚に合わせて消化・吸収する段階へと移行しました。これが「国風文化」であり、漢字を簡略化した仮名文字によって、紫式部の『源氏物語』などの優れたかな文学が生まれたことが大きな特徴です。選択肢にある猿楽や田楽はのちの時代、浮世草子は江戸時代、禅宗の影響は鎌倉・室町時代に顕著になる特徴です。                             |
| 問4  | 答え 4<br>阿弥陀如来の力によって極楽浄土への往生を願う浄土信仰                           | 平安時代中期から後期にかけて、戦乱や飢饉などの社会不安を背景に、現世の苦しみから救われ、死後に「極楽浄土」へ生まれ変わることを切望する浄土信仰が急速に広まりました。これは「南無阿弥陀仏」と唱える「念仏」という簡潔な教えであったため、貴族から民衆まで広く受け入れられることとなりました。選択肢にある禅宗は鎌倉時代に武士の間で流行したものであり、国分寺建立は奈良時代の出来事です。                          |
| 問5  | 答え 2<br>紫式部                                                  | 国風文化の時期には、かな文字の発達により、宮廷に仕える女性による優れた文学作品が誕生しました。紫式部は一条天皇の中宮彰子に仕え、世界最古の長編小説とも言われる『源氏物語』を執筆しました。選択肢にある清少納言は、中宮定子に仕えて随筆『枕草子』を執筆した人物です。                                                                                    |
| 問6  | 答え 2<br>平将門が関東において反乱を起こし、自ら「新皇」と称して朝廷に抵抗した。                  | 武士が歴史の表舞台に登場する大きな契機となったのは10世紀半ばの出来事です。関東では平将門の乱、瀬戸内海では藤原純友の乱が発生し、朝廷はこれらの反乱を鎮圧するために他の武士の力を借りる必要がありました。これにより武士の軍事力が中央でも認められるようになりました。その後、11世紀後半に源義家が東北の戦乱（後三年の役など）を平定し、12世紀後半に平清盛が政権を握り、1192年に源頼朝が鎌倉幕府を成立させるという流れになります。 |
| 問7  | 答え 2<br>政治に深く関わりすぎた奈良の仏教から離れ、山の中で厳しい修行を行う山岳仏教としての性質を強めた。     | 奈良時代の仏教は政治と密接に結びつき、大きな影響力を持っていました。平安時代になると、桓武天皇による平安京遷都とともに、政治との関わりを絶ち、山の中で厳しい修行に専念する最澄の天台宗や空海の真言宗が、新しい時代の仏教として受け入れられました。                                                                                             |
| 問8  | 答え 4<br>桓武天皇                                                 | 794年に、都を長岡京から平安京（現在の京都市）へと移し、平安時代を切り開きました。当時、政治に強く介入するようになっていた奈良の仏教勢力から離れ、天皇を中心とする政治の仕組みを再構築することが大きな目的でした。                                                                                                            |
| 問9  | 答え 3<br>かな文字が考案され、清少納言などの女性らによって随筆や物語が執筆された。                 | 遣唐使の廃止後、日本の風土や生活に合わせた「国風文化」が花開きました。特に漢字を簡略化した「かな文字」の成立は大きく、これによって清少納言の『枕草子』に代表される随筆や、和歌、物語といった女性による優れた宮廷文学が数多く生み出されました。                                                                                               |
| 問10 | 答え 3<br>太政大臣                                                 | 平清盛は1167年に、それまで貴族の独占状態であった最高官職の太政大臣に就任しました。これにより、平氏の一族が政治の要職を占める「平氏政権」を確立し、武士が政治の実権を握る先駆けとなりました。                                                                                                                      |
| 問11 | 答え 1<br>天皇が位を退いて上皇となり、摂政や関白を抑えて「院」と呼ばれる場所で自ら政治を行う仕組み。        | 院政は、摂関家（藤原氏）との血縁関係が薄い後三条天皇のあとの白河天皇が、摂関政治を打破するために始めました。上皇は、自らの直属の軍事力として「北面の武士」を組織するなど、独自の権力基盤を固めました。この体制は、のちの武士の台頭にも大きな影響を与えました。                                                                                       |
| 問12 | 答え 1<br>外戚（がいせき）の立場を利用した、摂関政治                                | 藤原氏は、自分の娘を天皇の后にし、その間に生まれた子（自分の孫）を次の天皇に立てることで、天皇の母方の親戚である「外戚」として大きな影響力を持ちました。この手法によって、天皇が幼少の時には「摂政」、成人してからは「関白」という職に就き、政治の実権を独占する摂関政治を確立しました。藤原道長とその子の頼通の時代に、この政治体制は全盛期を迎えました。                                         |
| 問13 | 答え 4<br>外戚                                                   | 藤原氏は、自分の娘が産んだ皇子を天皇に立てることで、天皇の母方の祖父として強い発言権を持ちました。この「母方の親戚」という関係を外戚（がいせき）と呼びます。道長はこの外戚関係を背景に、摂政などの要職を独占し、藤原氏の全盛期を築き上げました。                                                                                              |